

HOT! FUN! IWAKI!

MIRAIの 医療ZINE (人)



「いわきの医（いわきの地域医療）」とは

私たち福島県いわき市は、人口約34万人が暮らす中核市。とても深刻な医師不足にずっと見舞われている。医師不足を謳う地方都市は多いだろう。でも、私たちいわき市の医師不足はガチだ。その上、医師の高齢化も深刻。全国に60都市ある中核市の中で、医師不足は下から6番目の55位、医師の高齢化は下から2番目の59位。ね、ガチでしょ。

でも、悲壮感たっぷりに「医師の皆さん、是非いわきに来てください」とお願い一辺倒だけじゃないアプローチを模索したいと思っている。「お願いされたから行く」だけじゃない、「いわきに行ってみようかな」「どうやら最近、いわきがアツイらしい」「いわきに行くと、研鑽が積めて、成長できるみたい」。

いわきがそんな、これからの医療人の学びのフィールドになれば、サイコーだ。

今は妄想に聞こえるかもしれない。でも、私たちいわきの医療関係者は本気だ。いわき全体が、病院もクリニックも医療介護の多職種も垣根を超えて「チームいわき」で、これからの医療人をアツく、笑顔でお迎えします。切磋琢磨される若き研修医の皆さんも、セカンドキャリアに挑まれる先生方も、チャレンジする全ての方が「未来の医療人」。いわきの地域医療は、そんな皆さんをお待ちしています。「全国トップクラスの医師不足の地域が、医療人が集う学びのフィールドへ」

地域医療のジャイキリを是非、あなたとともに。

こんな取り組みを行っています！



小中学校に医師や専門職がアウトリーチして、医療介護や健康について直接授業を行ったり、高校生には現役医師が縫合体験教室を実施したり、医大生3年生をいわきにお招きして、病院から地域の現場までたっぷり体験してもらい、研修医は病院の垣根を超えて、合同で勉強会&交流会を行うなど、切れ目なく「医療の学び」を展開します。

＼ここでは紹介しきれないので、ぜひサイトをのぞいてみてください！／

WEB サイト <https://iwakinoiryo.com>



「MIRAIの医療ZINE」について

若き医大生や研修医の皆さんはもちろんのこと、セカンドキャリアも含め、新たにチャレンジするすべての方が、私たちいわきの地域医療にとっては「未来の医療人」です。個人やグループが自由な手法、テーマで制作した小冊子をZINE（ジン）と言いますが、いわきの地域医療の様々な現場、様々なステージで、チャレンジするこれからの医療人の思いや取り組みを、できれば明るくポップに発信していきたい。WEBやSNSと連動させながら、フットワーク軽く、シンプルなZINEで、いわきのこれからをお伝えしていきます。いわきの地域医療がお送りする「MIRAIの医療ZINE」、どうぞよろしくお願ひします。

いわきの
地域医療
SNS

いわきの医



Follow Us!!!



新たに生まれる、 いわきの「医」のコミュニティ

課題だらけのいわきの医療に差す、一筋の光となるか。7月、いわき市の病院に所属する若手研修医たちが、病院や部局の壁を超え、共に学び合う勉強会、交流会が開催された。知識や経験を先輩医師から学ぶだけでなく、交流を通じて「横の連携」もつくっていきこうというのがミソだ。「医療課題先進地区」から「医を学び合うコミュニティ」へ。研修医たちから生まれている新たな胎動を取材した。

文 = 小松理虔 写真 = 鈴木宇宙



病院の垣根を超えて合同勉強会に参加した24名の若き初期研修医の皆さん。谷掛医師の話から学びを深めた。

失敗も、課題も、学びになる、学びにする

2023年7月7日、夜7時。内郷にあるいわき市医療センターのきょうりつ講堂は、熱気に包まれていた。いわき市医療センター、福島労災病院、常磐病院。いわき市内の3つの病院に勤務する初期研修医たちが一堂に会する勉強会が開催されたのだ。講師を務めるのは、京都市立病院の放射線診断科・IVR科部長でいらっしゃる谷掛雅人医師。



講師の谷掛雅人医師は「失敗症例から学ぶ急性腹症の画像診断」と題して、自身の失敗談も含め、重要なポイントを分かりやすくご講義くださった。

急性腹症の画像診断を中心に、谷掛医師の失敗談から学ぶという内容だった。

『急性腹症』というのは、急激に発症し、激しい腹痛を伴う疾患の総称。早急な診断が必要であり、治療方法を決めるには画像診断が鍵を握る。谷掛医師は、思い込みや無知などから生まれた失敗談をもとに、突き詰めて考えていくこと、画像1枚1枚をしつこく丁寧に読み解いていくことの重要性を、研修医に説いていた。参加した初期研修医たちも真剣だ。姿勢を崩すことなく谷掛医師の言葉に食らいついていたのが印象的だった。

医師不足が謳われて久しいいわき市だが、少しずつ変わろうとしている。2023年度には、いわき市の3つの基幹型臨床研修病院（いわき市医療センター、福島労災病院、常磐病院）が、合計で17人の研修医を受け入れた。これは過去最高の水準である。新型コロナもあったが、むしろ市内の病院間の連携が強固に培われた。いわきで研鑽を積みたいと思う研修医が増え、病院間の連携も進んだ。それで今回、病院横断型の勉強会が開催され、30名を超える初期研修医が病院の垣根を超えて集まった、というわけだ。

学びのあとは、お楽しみ

90分に及ぶ勉強会が終わると、会場を平上荒川の「いつだれキッチン」に移して交流会。勉強のあとに、おいしいご飯とお酒、仲間たちとの交流があるからこそ学びにも



普段は「頂いた食材」を活用している「いつだれキッチン」も、この日はやはり未来の医療人のために腕を振るっておもてなし。

力が入るというもの。いつだれキッチンの母ちゃんたちも、いつも以上に豪勢に腕をふるい、絶品料理を何品も用意して研修医たちをもてなした。

最初は病院ごとのグループに分かれて着席していた研修医たちだったが、お酒の力もあってか、自然と交流が生まれる。普段は仕事で忙しい研修医たちも、この時間ばかりは仲間たちとの交流やおしゃべりを楽しむことができたようだ。何人かの研修医に、今日の手応えを聞いてみた。

「自分も当直が始まって、自分で画像を見ることが増えてきたので、先生の話はとても勉強になりました。もともといわき出身で、いわきで医者になりたいと思っていました。たしかに病院や医師の数は多くないですけど、少しでもいわきの医療環境が良くなるように自分も微力ながら尽力したい、ということは思っています。勉強会の後に交流があるという形がすごくいいですね。ほかの病院の先生とも、これからは知識や情報共有していければいいと思います」

「研修医としては1年目です。谷掛先生の話は、身に染みる体験でとてもよかったと思いますし、研修のあとにすぐ交流会があるというのがとてもいいと思います。こういう形式の勉強会は初めてなので、とても楽しいです。周りの研修医たちもレベルが高いですし、いわきは過ごしやすい土地だし、研修医にとっても、いい環境だと思います」

いわき市医療センターで指導責任者を務める吉田寛先生はこう語る。「ワイワイと交流するだけでなく、第一線の先生を招いた学びがあるということが重要ですが、みんなで顔を合わせて交流する場もやはり大事ですね。新型コロナウイルスの影響でしばらく開催できませんでしたが、人が集まり交流する場には、お互いに異なる文化や学問を学ぶ機会が生まれます。交流会を組み合わせるのがとてもよかったですね」。



それぞれの病院長と指導医も参加され、病院の垣根を超えての学びと交流が、世代も超えて、笑顔とともにどんどん深まる。「楽しみながら」がポイントだ。

みなさんのコメントに、ハッと気づかされる。勉強会だけでも十分だが、それだけでは「コミュニティ」にはなりにくいということかもしれない。勉強会で学んだこと、日々感じていることをシェアしあったり、お酒の力も借りながら、交流することを通じて初めて「学びのコミュニティ」に変化していくのだ。そしてこの「学びのコミュニティ」は、次の時代の医療を形づくっていく鍵になると感じる。

医療を学ぶコミュニティ。言うなれば「メディカル・ラーニング・コミュニティ」。それをデザインしていくことが、これからの「いわきの医」を支えていくことにつながるのではないか。いわきの魅力、充実した学び、さらには交流とネットワーク。病院の数や、医師の数が急には増えないからこそ、いわき市は、多様な人たちがつながり合うことで、学びのネットワークの網の目を細かくしていく。



いつだれキッチンの温かい手料理。研修医をもてなすべく、何品もバランスよく取り揃えて下さった。好きなだけ何度もおかわりしているのが印象的だった。